

新富山大学 芸術文化学部 創設記念フォーラム

「世界が注目する日本の芸術文化」

- 開催日 平成17年9月30日(金)
- 会場 ウイング・ウイング高岡4階ホール
高岡市末広町2丁目1番1号

平成17年9月30日、高岡短期大学が富山大学の芸術文化学部として再出発をすることを記念して「世界が注目する日本の芸術文化」をテーマにしたフォーラムが開催されました。

ゲストには、世界を舞台に活躍している日本人アーティスト4名をお招きし、それぞれの講演とコーディネータの前田一樹教授（現芸術文化学部長）とのパネルディスカッションが繰り広げられました。

開催の主旨

富山・高岡地域の発展を目指し、海外で活躍している方々とともに、芸術文化のあり方や日本文化の発信について考えます。また、フォーラムを契機に、地域社会と新富山大学芸術文化学部の強い絆の構築、および、より深い芸術への探究心の向上と理解を深めることを目的としています。

Program

開会挨拶	滝沢 浩	国立大学法人高岡短期大学副学長
	橘 慶一郎	高岡市長
講演	講師+パネリスト	伊藤 節
		伊藤志信
		瀧上憲二
		瀧上妙子

パネルディスカッション

	コーディネーター	前田一樹	国立大学法人高岡短期大学学長補佐
閉会挨拶		竹平栄太郎	高岡商工会議所副会頭

●各氏の肩書きは開催当時



コーディネーター
前田一樹
Maeda Kazuki

Panelists

パネリスト

伊藤 節
Ito Setsu



パネリスト

伊藤志信
Ito Shinobu



デザイナー/建築家、ミラノ在住。伊藤節：筑波大学大学院修了。伊藤志信：多摩美術大学、ドムス・アカデミー（伊）マスター修了。1995年にミラノで建築デザイン・スタジオを開設し、イタリアをはじめとする欧州、日本の企業とのデザイン開発、建築プロジェクト、コンサルタントを行う。また一方で、パッケージデザイン、グラフィックデザインも手掛ける。現在、De Padova, Edra, Fiam Italia, felicerossi, Guzzini, NAVA, Richard Ginori, Colle-Vilca, Swarovski, Ritzenhoff, Tiffany, Sony CP Laboratories, Hitachi, Sharp, Toshiba, Canon, Mitsubishi, TDK, icx, Toyo kitchen & living 等の企業とデザインの共同開発を行っている。YOUNG&DESIGN 1999 受賞（伊）、GOOD DESIGN 2001 受賞（日）、Toyama Design Award 2001 受賞（日）、Premio Compasso d'oro 2001（伊）に選出される。その作品はドイツの現代美術館にパーマネントコレクションとして納められている。また各国で作品発表、展示会、講演会を行うかたわら、I.E.D. 大学（伊）、ドムスアカデミー（伊）で客員教授を勤める。多摩美術大学非常勤講師。www.studioito.com

パネリスト

瀧上憲二
Takigami Kenji



パネリスト

瀧上妙子
Takigami Taeko



瀧上憲二：フォトグラファー。東京生まれ。外交官の家庭に生まれ多様な人種、異なる文化の影響を受けながら育つ。1966年よりニューヨーク在住。Germain School of Photography 卒業後、世界で5本の指に数えられた、フランス人ファッション・フォトグラファー、Alex ChatelainのもとでVogue、Elle、Harper's Bazaar 誌などの撮影に携わる。1970年代後半にはジャズの巨匠、Elvin Jones と知り合い、ヨーロッパ、南米、日本などの公演に同行、「カメラを通しての被写体とのコミュニケーション」の大切さを体得した。現在は Kenji Takigami Studio として広告、雑誌の撮影依頼を受ける傍ら、アーティストとしてのライフワークである人物撮影の次の題材としてイスラエルとパレスティナでオーディナリー（普通）な人々のポートレート撮影を企画中。www.kenjitakigami.com

瀧上妙子：PR コンサルタント。Comculture Synergy LLC 代表。1981年よりニューヨークに暮らす。雑誌取材及び広告撮影のコーディネーションなど、一貫して人と人の中に入り異文化、異なった商習慣の調整役としての仕事に従事。2004年にはカナダ人と Comculture Synergy 社を設立。国際的なイベントの企画やプロデュース、日米双方からの相手国向け商品のローカライゼーション、マーケティング、広報活動などを中心に取引両社間に相乗効果をもたらすプロジェクトに対応している。去年は日本発の本格的な国際マガジンとして世界に向けて発売された家庭画報インターナショナル誌のアメリカ、カナダ市場定着を目的とした積極的なプロモーションを展開、同誌の北米における認知度を高めた。



橘高岡市長の開会挨拶



伊藤節・志信夫妻の講演

Presentation

若さ溢れる会場

- 350人のオーディエンス

対

4人のグローバルなアーティスト -

平成18年10月1日（フォーラムが開催された翌日）から、富山大学芸術文化学部がスタートしました。創設を記念したフォーラム開催に際し、開会の挨拶に立った滝沢浩副学長から改めて示されたのは、新学部のコンセプトである「地域密着型でありグローバルな学部を」というメッセージでした。また、橘慶一郎高岡市長からは、ものづくり高岡の地にある芸術系大学で、これから若い人がどのような事を獲得し発信するのか期待したいとの挨拶がありました。

会場となった『ウイング・ウイング高岡』のホールには、開場とともに、高岡短期大学の学生をはじめ、地元の高校生、地域市民のみなさんなど、高岡の地に縁のある多彩な人たちが続々と訪れ、ホール席の他に、パネリストを囲む形で椅子を追加するほどの盛況ぶりでした。まさに、地域と世界を結ぶ、「世界目線」で地域を語るフォーラムという、活気と若さ溢れる雰囲気集いとなりました。

今回のフォーラムでは、「グローバル」の名に相応しいゲストの方々が高岡にやってきてくれました。ゲストパネリストは、イタリア・ミラノで建築家・デザイナーとして活躍されている伊藤節、伊藤志信ご夫妻、ニューヨークで写真家として活躍されている瀧上憲二、パブリックリレーションコーディネーターとして活躍されている瀧上妙子ご夫妻の4名です。

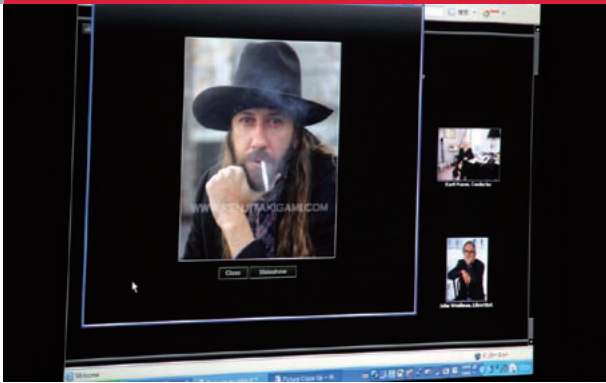
高岡≠ミラノ!? 職人とデザイナー

伊藤節、志信ご夫妻は、それぞれ17年間と9年間ミラノにお住いで、毎年ミラノ・サローネにコレクションを出品されている気鋭のデザイナーです。仕事は家具からテーブルウェア、ステーションリーデザインまで多岐に渡ります。イタリア・モダニズムの巨匠アンジェロ・マンジャロッチェ氏との仕事の経験もあり、エリザベス女王がミラノを訪問した際のテーブルウェアのデザインを担当されたこともあります。

壇上に立った伊藤ご夫妻は、ミラノと高岡の共通点をいくつか挙げ、この2つの都市はとても似ている点がある話をされました。第一に、食べ物が美味しいこと。高岡にもミラノにも、常に新鮮で豊富な食材がある。デザインに直接関係はありませんが、これはご夫妻にとって、住む上でとても重要な要素だそうです。第二に、程良い大きさの街の規模。良質な工芸文化は、東京やニューヨークのような巨大都市よりも、程良いサイズの中小都市の方が育まれやすいとも。そして第三に、その街に工芸文化の伝統と歴史があり、それを支える中小企業や職人がたくさんいるこ



伊藤節・志信夫妻



「ORDINARY NEW YORKERS」



瀧上憲二夫妻の講演

と。まさに、ミラノも高岡も、伊藤ご夫妻が掲げた条件を理想的に満たしている街なのです。

そのような環境の中で、職人とデザイナーが密なコミュニケーションをとりあいながらものづくりをリードしてゆくべきだと伊藤夫妻は主張します。「極論すれば、デザイナーやクリエイターは、手先が器用である必要はありません。ものづくりに際して、それは得てして、新しいものを生み出す芽を摘んでしまうことにもなりかねないから」とも語り、たとえばプラスチック成形にしても、そのノウハウを知らないことが常識にかからないものを発想し、新しいデザイン力を発揮できることにもなると力説しました。

最後に、高岡には優秀な職人が多いということ前置きし、「デザイナーの武器は発想力。新しい発想力で職人を困らせるくらいの状況を作り出すことが、結果的に職人とデザイナーを切磋琢磨させ、よりよいものづくりを可能にするのです」と、熱く語りかけるご夫妻の姿が、とても印象的でした。



瀧上憲二夫妻

街への視線、異文化への感性。

瀧上憲二さんは日本の女性誌とも多く仕事をされている写真家で、ファッション写真から有名人のポートレート、街角の風景など、被写体を問わず多彩な活躍をされています。ジャズドラマー、エルヴィン・ジョーンズのツアーにオフィシャル・フォトグラファーとして7年間同行した経験もあり、現在はニューヨークに住む有名無名の人々のポートレートを集め「ORDINARY NEW YORKERS」というシリーズを製作中です。

ニューヨークという無国籍な街、隣人に超有名人と労働者が同居するこの街の風景に、憲二さんは愛情ある視線を向けます。「ニューヨークの街角は、だから面白いんです。僕の被写体は、作家のピート・ハミルやピカソの孫から路上のホットドッグ売りまで、様々です。彼らはみんな<普通のニュー Yorker>なんです。だからこの街はエキサイティングなんです！」と熱く語る憲二さんは、会場の若者達にもニューヨークという街を体験するべきだと言います。

「みなさんも、ぜひ一度ニューヨークという街を訪れるべきです。いつかチャンスがあったらじゃダメなんです。必ず訪れるべき街なんです。」

このように、メガロポリスの日常の一瞬を繊細に写真として結実させる憲二さんの感性と技術は、多くの著名人やパブリッシャーからの信頼を得ています。数々の温もりある彼の作品には、人々に語りかけてくるようなパワーさえ秘めています。

奥様の妙子さんは、パブリック・リレーションの分野で、企業やアーティストの広報活動や異文化間でのコミュニケーションや商取引を円滑に進めるコンサルタント、コーディネータとして活躍されています。



パネルディスカッション

妙子さんは講演の中で、自身の仕事の経験から、「若い人はどんどん異文化に接するチャンスを作り、文化や価値観の違う人々の前で自分をアピールする能力を伸ばしていくべき」と訴えていました。また、「せっかくの才能を埋もれさせてしまうことも」とも語り、新しい大学にぜひ望むことは、「アーティストであっても、ただ才能や技能だけがあればいいのではなく、世界を相手に自分のセルフ・プレゼンテーション、セルフ・プロモーションをする能力を身につけることが重要、そういう人を育てて欲しい。」と語る妙子さんには、世界の第一線で活躍する人の説得力がありました。

Panel Discussion

パネルディスカッション

お二組の講演が終わって、休憩をはさみ、パネルディスカッションが開かれました。

まず、ニューヨークヤンキーズの優勝の可能性など、身近な話題からなごやかに始まりました。しかしそんな時にも憲二さんは、取材をした某日本人大リーガー選手が米国のメディアで自己アピールの能力に欠けていたなどのエピソードを披露し、常に世界に対峙して日本人はどういう態度でチャレンジをしていくべきかという問題を真摯に語られていました。

一方、伊藤ご夫妻は、ミラノという街の特性、ミラノ・サローネの歴史などを聴衆にわかりやすい言葉で解説し、この街がいかにものづくりをサポートし、バックアップすることに優れているかを力説してくれました。節さんによると、小さな街にメーカーがあって、デザイナーがいて、職人街がある。さらにメディアがあり、ショールームがあり、学校がある。これがミラノという街の特性であり、そ



ステージに展示された伊藤夫妻の作品

してこれらの要素が揃うことは高岡という街でも可能だということです。

また、有名な歴史のあるプラスチックメーカーの例をあげ、歴史に胡坐をかかず常に時代をみながら新しいことに挑戦し新しい製品を作り続ける話や、ものづくりに関する街の機能の考え方はとても興味深く、高岡がミラノという街の歴史と響き合う可能性を示唆してくれたように思えました。

さらに、日本の工芸品をそのまま世界に受け入れてもらえるかという話題では、本当に受け入れられるには、ローカライゼーション：その地域の市場にマッチしたものに少し変えることも必要であるという妙子さんや志信さんの話も新鮮でした。

しかし、話は堅い話題ばかりにはとどまりません。伊藤ご夫妻は、イタリアの食べ物がいかに美味しいかを語り、その姿にはまさに「人生を楽しむ者」の輝きがありました。節さん曰く「僕はモノが美味しくない場所は信用しないことにしてるんだ」蓋し名言です！



会場が突然の撮影会場に



ユーモアたっぷりの返答する瀧上さん



会場からは次々と意見や質問が出された

会場とのコラボレーション

会場からは、多くの質問の手があがりました。

たとえば、外国に行く際にこれだけは身につけてきて欲しいことについては、日本人としてのアイデンティティを持つこと、日本の歴史を学ぶこと、自分の名前（漢字）の意味を知ることなど、自分（日本）のことを知ることが大切という点が共通した意見でした。

また、イタリアのデザインが常に進化しているとは何をさすのかという質問には、デザインと技術革新とがせめぎあって時代に対応することが進化であるという視点が話されました。

他に、作品とコストの関係については、コストがかかっても正直に本物を作ることが大切であるということ。高岡の主要産業であるアルミ素材のこれからの可能性については、これはできないとかできないだろうではなく、やってみようと思うことが大切で、アルミは面白い素材であると話が進みました。

こうして、予定された時間が瞬く間に過ぎ、最後にパネリストの方から、若者や大学に対してメッセージを一言ずついただきました。



竹平高岡商工会議所副会頭の閉会挨拶

憲二さん：これから写真をはじめようと思う人にとって一番よい勉強方法は、写真以外のことに興味を持つこと。一つにこだわらずになんでも学んで欲しい。

妙子さん：高岡は伝統産業や工芸があり本物を作る職人さんがいる。大学が新しくなり世界に発信する準備ができた。あとはいかに世界にプレゼンしプロモートしていくか、大学でしっかり育成して欲しい。

志信さん：これから学ぶ皆さんは、東京や都市を向く必要はなく高岡で集中できる好きなことを見つけて欲しい。いろいろな経験や旅をして視野を広げて欲しい。

節さん：デザインの分野でも専門化・分業化が進んでいるが、分野を超えて興味を持って欲しい。新しいコラボレーションの中から素晴らしいアイデアがでるかも。チャレンジすることそれが大学に望むこと。

若い力へ託す

刺激的で楽しいパネル・ディスカッションも終わり、最後に、産業界を代表して竹平栄太郎高岡商工会議所副会頭から、外へでることの大切さ、地域で面白いものを作るには、地域、産業、大学の連携が欠かせないなど感想を含めて閉会の挨拶をいただきました。

3時間を超えたフォーラムは、4名の素晴らしいゲストを迎えて熱気溢れる大盛況のうちに幕を閉じました。しかし、なかでも印象的だったのは、会場を訪れていた多くの若者たちの姿かもしれません。

ワールドワイドな活躍をするゲストたちの話に一心に耳を傾ける彼らを見ると、その中から、近い将来世界に羽ばたいてゆく未来のアーティストが生まれてくるのだろうと確信させられます。そしてまた、そこから、彼らはグローバルな視点で、高岡という街を再発見してゆくでしょう。

● 本稿は、<http://www.geibun.jp/artabe/> より抜粋（一部加筆修正）

小松裕子

来場者アンケート

来場者数: 340名

アンケート回収数: 261名 (回収率63.5%)

Questionnaire

A: 参加者の横顔

(1) 性別 … [図1]

参加者の男女別の割合は、およそ男性32%、女性68%で、多くの女性の参加がありました。

(2) 年齢 … [図2]、職業 … [図3]

参加者の年齢は10歳代と20歳代をあわせて63%で、職業別で見ると高校生と学生(大学生)で57%を占めるなど、若い方の参加が多かったことがわかります。

(3) 居住地 … [図4]

90%以上が県内からの参加で、高岡市の方が半数を占め、県外からも7%の参加をいただきました。

B: フォーラムの評価

(1) フォーラム内容への興味 … [図5]

約90%の参加者が内容に興味を持って参加してもらえたことがわかります。

(2) 特に興味をもった内容 … [図6]

特に興味を持った内容としては、「海外での活動や生活」(72%)、「海外から見た日本」(39%)であり、「富山や高岡の今後」は12%にとどまりました。富山や高岡の今後については、もう少し深い議論を期待していたので残念であるという記述もありました。

(3) 世界に活動を広げることへの自由記述

本設問へは52%(112名)から、コメントをいただきました。いろいろな文化(世界)からの視点、それを踏まえた地域独自のものやデザインの必要性の記述のほか、本学芸術文化学部がそれを担うことを期待したいという意見も数多く寄せられ、本学部の方向性を考える上で貴重な資料となりました。

コメント(一部)

- ・高岡は「伝統工芸」というイメージが強かったが、今日のフォーラムを聞いて「分野を超えて」ということに可能性を感じた。
- ・高岡の技と若い人の力を結集して、世界に発信してほしい。
- ・富山には高い技術を持つ方が多い。芸術文化学部ではその技の発掘と継承も担ってほしい。

(4) 高校生、学生対象の自由記述

ーパネリストの話などで、どのようなことに一番興味を引かれたかー

高校生と大学生のうち、70%(84名)からさまざまな記述がありました。特にこれまで一般のフォーラムに参加する機会がなく、今回初めて参加したことで新しい視点や広い分野への興味をもった、パネリストの活躍の話や作品紹介から多くの刺激を受けたといった記述が多くありました。これらの記述から、若い学生が芸術文化を考えるきっかけをつくることのできたのではないかと考えています。

コメント(一部)

- ・いろいろな分野のことを広く理解しようとする姿勢の大切さを学びました。
- ・日本ではなく海外で活躍されている方々のお話が新鮮でした。
- ・職人、デザイナー、プロモーターが一体となってもつくりがあるという話が興味深かった。
- ・職人と発想のコミュニケーションをとることが大事であること。高岡はそういう点で環境があることを改めて気づかされた。

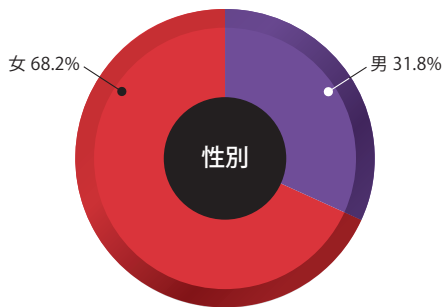
まとめ

都市への集中から地域の伝統文化が失われていく一方で、日本が世界で発展するためには地域の伝統文化が必要になるというジレンマの中で、「東京」を経由せずに直接世界とつながることが有望なのではないかという問題意識を背景にこのフォーラムを計画しました。

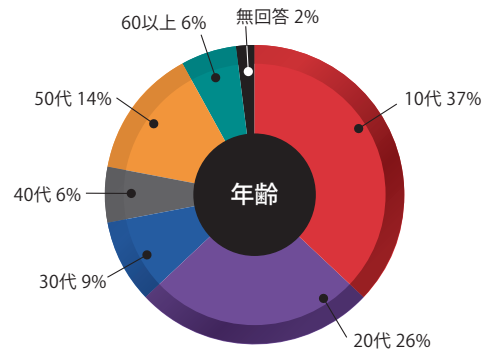
幸いにフォーラムは盛況に終わり、アンケートの結果からも多くの反響を得ることができました。同時に、富山大学芸術文化学部への地域からの熱い期待と果たしていくべき責任を強く実感したフォーラムでもありました。

今回のフォーラムで、富山・高岡地域の発展と芸術文化のあり方や日本文化への理解と世界への発信について地域の人々と一緒に考えることができました。深く感謝いたします。

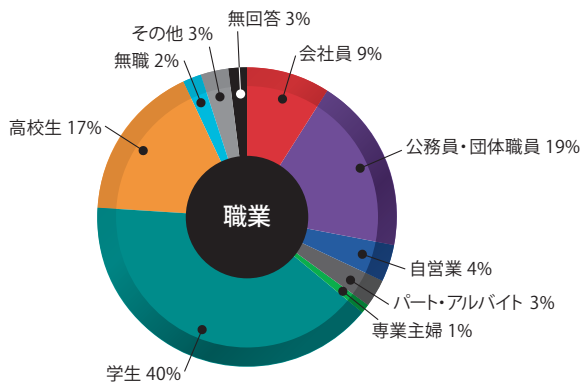
小松裕子



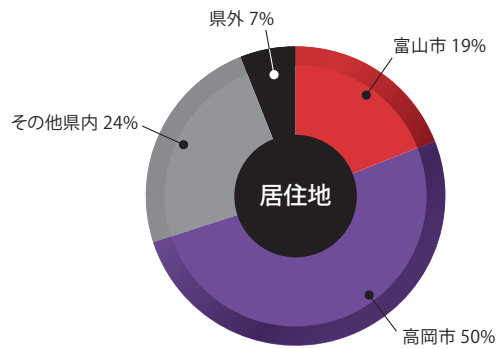
[図1]



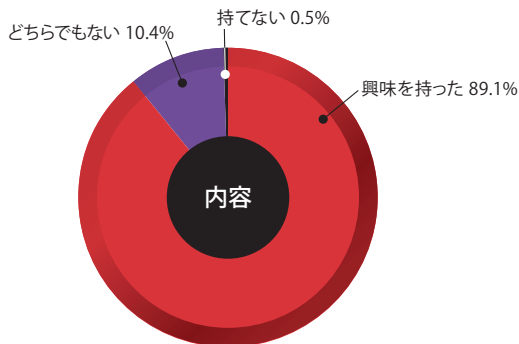
[図2]



[図3]

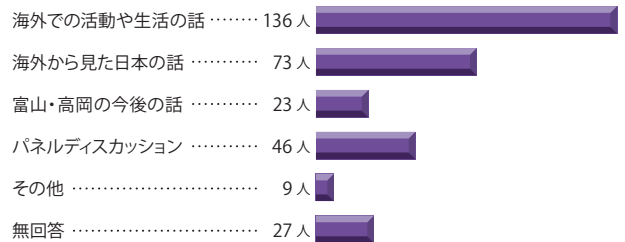


[図4]



[図5]

興味を持った内容 (複数回答)



[図6]